婦人講座

婦人と文藝

千葉亀雄

一　文學とは何ぞや

日本の歴史を讀んで來ると、神武天皇の御世に入る神代に、婦人の和歌が見えて居る。それは沼河姫（ぬなかはひめ）の歌といふので、

やちほこの、神の命、ぬえくさの、めにしあれば、我が心、浦洲（うらす）の鳥ぞ、いまこそは、千鳥にあらめ、後こそは、なとりにあらむを、いのちは、な死せたまひそ、いしたふや、あまはせ使（つかひ）、ことの、かたりごとも、こをば

これが歌の全文で、日本婦人の和歌としてのみでなく、婦人としての文學も、始めて現はれたあると云はれる。

これは八千矛（やちほこ）の神（かみ）なる男性が和歌に答へたもので、沼河姫は八千矛の神は大國主（おほくにぬし）の神の一名、越國（こしのくに）越後に幸（みゆき）して、沼河姫の家に着かれた時、一首の歌を呼（よ）んだ。今は、越後の頸（くび）城（き）郡に、沼河姫の社（やしろ）があるとの事であるが、

10
20
ノーブル